

現場の技術力を次世代に繋げていきたい。

近藤ほのか

縫製ライン サブリーダー / 生産管理 縫製



もっと生の声

Q & A

— 思い出に残っているエピソードを教えてください。

娘の小学校の制服を当社が担当していて、自分が実際に縫製したスカートを「これを着て小学校に行くんだよ」と娘に手渡せたことです。小学校4年生になりましたが、毎朝、制服姿の娘が可愛いなと思いながら送り出しています。

— やりがいを感じるの、どんな時ですか？

実際に制服を着用する児童や生徒さんのことを想いながら作業しているときにやりがいを感じます。小さなサイズだと何歳くらいの子が着るのかなと考えたり、注文数によっては大きな学校なんだろうなと想像したり。実際、学校のホームページを検索したりして具体的にイメージすることもあります。

— 今後取り組んでみたい、実現したいことはありますか？

LGBTQの方への配慮などで、ブレザーが主流となったり、スカートと同じ生地で作ったスラックスを学校側に提案するなど、制服を取り巻く環境の変化に対応している会社なので、現場からも色々発信していったりよい仕事に繋げていきたいです。



「小学校の時に制服で着ていたセーラー服が可愛くて好きで、小学生の時の工場見学で、その制服が地元で作られていると知ってすごく嬉しかったです。」と話す近藤さん。地元に住み続けたい気持ちも強かったことから、高校卒業後、菅公学生服への入社を決めました。

入社以来スカートの縫製を担当し、全ての工程の経験を積んだ入社13年目となる現在は23人のグループのサブリーダーを任されています。「ラインの生産性が上がるように、その日ラインに入る人の配置を調整したり、流す商品の順番や切り替えるタイミングを工夫したりしています。」

「同じデザインでも生地によって縫い加減を変えたり、アイロンをあてる時間や力加減を調整したり細部にわたる高い技術が現場にはあります。」その高い技術力が自社のブランドであり、それを次に繋げていくことも自分たちの使命だと話す近藤さん。

自社の制服だけでなく、様々な繊維産業についてこの地域が持つ技術力の高さにも誇りに感じているそうです。「繊維のまちとして歴史があり、自分はここで生まれ育って、地場産業である繊維の仕事に携われてよかった。産地として技術力を継承していくためにも今後も多くの人に関わってもらいたいです。」

また、働く環境について、会社のサポート体制が整っているため子育てしながらでも働きやすいと話す近藤さん。「育休復帰後、9年間、短時間勤務させてもらって会社には感謝しています。出産を控えている後輩たちにも、『無理なく働き続けられるから安心して。』と声をかけています。」

